

シカゴ大学実験学校におけるデューイ教育思想の継承と今日的意義

—シルビー・アングリン校長による講演を踏まえて—

中村 和世

本稿は、2016年7月2日・5日に広島大学学習システム促進研究センター（RIDLS）の主催で開催された講演会である「アメリカの教育改革と学校教育の再設計—シカゴ大学実験学校の21世紀型学習—」でのシルビー・アングリン校長による発表を踏まえて、今日のシカゴ大学実験学校がジョン・デューイの教育思想をどのように継承し教育実践を進めているのかについて検討することを目的とする。実験学校小学校の運営方針の特徴について、①教育理念、②カリキュラム、③教師の専門性に焦点を当てて検討するとともに、実験学校で開発されている21世紀型学習について実践事例である「遊び場の建設プロジェクト」の分析を通してデューイ教育思想との関係を明確化している。結論では、次期改訂の学習指導要領の方向性を踏まえながら、実験学校の今日的意義について考察した。

キーワード：シカゴ大学実験学校，ジョン・デューイ，21世紀型学習，学習指導要領

Inheritance of Dewey's Philosophy of Education at the University of Chicago Laboratory Schools and Today's Significance: Critical Review of Sylvie Anglin's Speech

Kazuyo Nakamura

This paper aimed to investigate how today's University of Chicago Laboratory Schools succeeds with John Dewey's educational philosophy and promotes educational practices, based on a presentation by Principal Sylvia Anglin at the lecture conference "American Educational Reform and Redesign of School Education—21st Century Learning at the University of Chicago Laboratory Schools" hosted by the Research Initiative for Developing Learning Systems (RIDLS) at Hiroshima University on July 2 and 5, 2016. For the characteristics of operation policy of the Lower School at the University of Chicago Laboratory Schools, in addition to investigating with a focus on (1) educational philosophy, (2) curriculum, and (3) teacher expertise, I also clarified the relationship with Dewey's educational philosophy through analysis of the "Playground Construction Project," which is a practical example of 21st Century Learning being developed at the Laboratory Schools. In conclusion, I discussed the contemporary significance of art education based on the direction of the next revision of the course of study guidelines.

中村 和世

Keywords: University of Chicago Laboratory Schools, John Dewey, 21st Century Learning, The Course of Study

1. 目的と方法

本稿は、21世紀の今日においてシカゴ大学実験学校がジョン・デューイ（1859-1952）の教育思想をどのように継承し教育実践を進めているのかについて検討するとともに、次期改訂の学習指導要領の方向性を踏まえながら、わが国の学校教育への示唆を得ることを目的とする。検討に際しては、2016年7月2日・5日に広島大学学習システム促進研究センター（RIDLS）の主催で開催された講演会である「アメリカの教育改革と学校教育の再設計ーシカゴ大学実験学校の21世紀型学習ー」において、シルビー・アングリン校長が発表した「小学校における21世紀型学習を創る：好奇心、創造性、自信、学問」の内容、校長に対するインタビューによって得られた情報、並びに、The University of Chicago(2015a)『シカゴ大学実験学校小学校ハンドブック』などのカリキュラムに関する資料を活用する。

2. シカゴ大学実験学校小学校の運営方針

(1) 教育理念

シカゴ大学実験学校は、デューイによって16人の児童数で始められたが、創設から120年を経た今日では、保育所・幼稚園、小学校、中学校、高等学校を併せ持ち、児童・生徒数が約1,850人、教員数が約230人の大規模校へと発展している。今日の実験学校の教育理念には、「シカゴ大学のアカデミックなコミュニティの最年少者にとって、実験学校は家です。私達は、持続する学問研究の精神、好奇心、創造性、自信に火を付け、それらを育成します。私達は、体験的に学ぶこと、思いやりを持つこと、多様性を尊重することを大事にします」（アングリン、2016、p.5、p.8）が示され、特に、保育所・幼稚園と小学校においてデューイの教育思想に沿った教育が進められている。

アングリン校長は、イリノイ大学シカゴ校で教育学修士号を取得後、シカゴ大学実験学

校上級小学校（Lower School）で学級担任として13年間教え、5年前から校長職に就いている。彼女の話によれば、実験学校では、教員による自主的なデューイ勉強会があり、21世紀の状況を踏まえてデューイ教育思想の再解釈を行い実践の開発に努めているという。アングリン校長はデューイ勉強会の主たるメンバーであり、彼女が編集した『シカゴ大学実験学校小学校ハンドブック』には、進歩主義教育の信条である以下の7項目が小学校の教育理念のベースになっていることが示されている（The University of Chicago, 2015a, p.7）。

- ・学習とは、課業よりも子供に焦点が当てられるべきです。学習とは小グループを通して最も効果的に達せられる社会的プロセスです。
- ・学習の効果は、体験型のプロジェクトを通して生み出されるべきです。例としては、演劇による歴史学習、自然研究による自然科学学習が挙げられます。
- ・教育の目標は、学業成績の優秀性のみでなく、創造的な問題解決力でもあるべきです。
- ・教育は、児童に学校のコミュニティとより大きな社会の両方に対する責任感覚を発達させることを伴います。
- ・学校の場における学習のプロセスは、日常生活で生じるタイプの学習と連続しているべきです。
- ・学問的な学習は、包括的であるべきであり、伝統的な教科のみでなく、芸術、スポーツ、多様な課外活動等の教科を含みます。
- ・教師の教育と研究を継続させることは、教師教育にとって不可欠な部分です。教師は、厳しい枠組みの中で意義ある自律性が与えられるべきです。

(2) カリキュラムの特徴

シカゴ大学実験学校小学校は、小学校1・2年生を対象とした下級小学校（Primary School）と小学校3・4・5年生を対象とした上級小学

校 (Lower School) から構成されている。上級小学校に所属する児童数は約 400 人、教員数は約 45 人、校種をまたがり上級小学校でも教える教員数は約 20 人であり、1 クラスには平均 23 人の児童がおり、各学年 2 クラスから構成されている。前述の教育信条に示されるように、学問的な教科等の枠組みをより包括的に捉え、下級小学校では、言語 (Language Arts)、算数、社会、文学 (Library)、美術、体育、コンピューター科学、音楽が必修教科等として位置づけられ、上級小学校では、これらに理科と世界言語 (フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語から選択) が加えられている (The University of Chicago, 2015b, p.19)。文学、理科、美術、体育、コンピューター科学、音楽、世界言語は専科教員もしくは学級担任と専科教員の協働によって教えられ、その他は学級担任が担当している。

カリキュラムの大きな特徴としては、創設当初の実験学校で行われた教育と同様、①児童の生活、②学校での学習、③社会の接続を重視した体験型学習を中心に置いていることである。アングリン校長の発表で紹介された事例には、小学校 3 年生がシカゴへのフィールド・トリップを通して共同で地図製作をする社会科の学習、実際の観察に基づいて昆虫について学ぶ理科の学習、シカゴ市にある公立小学校の 3 年生とチームを組んで一緒にシカゴについて学ぶ学習、小学校 5 年生が中世の人物を演じながら中世の生活様式を学ぶ歴史学習、フランス語のみを使用してフランス菓子をつくる中でフランス語を学ぶ世界言語の学習などがある (アングリン, 2016, 講演)¹⁾。アングリン校長によれば、日々、児童に挑戦を与え、グループで問題を共有させることが大事なのであり、小学校 3 年生から 5 年生の段階では、困難な問題に挑戦する経験を積み重ねることで、問題に対処する能力に自信を持つようになり成長していく自覚を持たせ充実感を与えることができるという。また、

協働的な活動をあらゆる学習に組み入れることで、協力することの大切さを実感させ、責任感や一人ひとりのアイデアを尊重する姿勢を育むことにも力が入れている。そのような教育を実現するために、上級小学校の段階では、児童の興味や能力の把握を目的とした事前調査の実施によって、それぞれの児童の特性に最も適した学習のステップを用意する「段階的な課題 (tiered assignments)」の方法、学習効果が最も高まるようにグループ組織の組み換えを工夫する「柔軟性を持たせたグルーピング (flexible grouping)」、特定のテーマのもとで教科横断的・総合的な学習を進める統合的カリキュラムの方法などが採用されている (The University of Chicago, 2015b, p.19)。

(3) 教師の専門性

設立当初の実験学校が「教育的思考の進歩に寄与すること」(デューイ, 2002, p.158) や「新しい真理あるいは新しい方法を案出し、かつ検証すること」(デューイ, 2002, p.156) をねらいとして、教育科学の発展を意図していたように、今日でも実験的な精神が受け継がれ、カリキュラムや学習指導の開発においては教員個人の主体性や創造性とともな協働性が重んじられている。教員に対しては、教師としての力量を高めるために学会やワークショップに参加したり、他校の授業を参観したり、大学院の授業を受講したりするなどの機会が開かれており、学校が研修費を支援している。デューイが「教えるという問題は、生徒の経験を、専門家がすでに知っていることの方へ進ませることである。だから、教師が、教材と、生徒の特有の必要と能力との、両方を知っていることが必要となるのである。」(デューイ, 2014, p.290) と述べるように、今日の実験学校においても、子供の発達や年齢に応じたニーズとともに専門教科の修得レベルをよく把握した上でカリキュラム

を開発することが基本とされている。開発に当たっては、多くの時間とエネルギーを費やしながら、教員間で考えを出し合い異なる意見を調停しお互いのよさが生かせるように協議が重ねられるという。そのような実験学校で求められる教員の姿について、アングリン校長は次のように表している（アングリン、2016、講演）。

教師も学び続ける存在でなければなりません。子供とともに成長し続ける存在でなければなりません。何年教えたかは問題ではありません。

私達、教師は子供とともに学びの旅に出る存在です。毎年、子供が学ぶと同じくらい教師も学びます。子供の興味と好奇心というものは常に私達に挑戦し続けて、私達を常に成長させ学ばせます。

3. シカゴ大学実験学校小学校における 21 世紀型学習

(1) 21 世紀型学習とデューイ教育思想の継承

21 世紀は「知識基盤社会」の時代として特徴づけられ、その特質は、①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される、と捉えられている（文部科学省、2006）。学校教育を通して、そのような構造的変化が伴う 21 世紀をよりよく生きられる人間を育成するために、次期改訂の学習指導要領では、特に、学ぶことと社会とのつながりを意識し、「何を教えるか」という知識の質・量の改善に加え、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視することがポイントとされている（文部科学省、2015）。

アングリン校長の発表によれば、アメリカにおいても、地球規模で進行している社会の構造的変化を見据えた教育改革が進められており、ここ数年間で、21 世紀の時代に必要とされるスキルについての議論が活発に行われているという。「読み書き計算」を中心にした学校は遠い過去のものになり、今日では、全米私立学校協会・会長であるパット・バセツトが提唱するように、「創造性 (Creativity)」、 「コラボレーション (Collaboration)」、 「批判的思考 (Critical Thinking)」、 「コミュニケーション (Communication)」、 「シティズンシップ (Citizenship)」、 「異文化間コンピテンシー (Cross-Cultural Competency)」の通称「5+1C」が、21 世紀の学校で育成すべき資質や能力として認識されているという¹⁾。そして、アングリン校長は、これらの資質や能力はデューイが 19 世紀末に提唱したものと同様であり、デューイの教育モデルにすべてが含まれていたと述べている。

デューイが生きた時代は、産業革命がもたらした結果として、今日とある意味では同質の社会的な構造変化が起こった時代であった。印刷機が発明され、書籍・雑誌・新聞などが版を重ね、特権的な学識階級を超えて、一般に学問が普及した時代であった。また、蒸気船の開発や機関車が走る鉄道整備に伴って旅行が以前より容易になり、国境を越えた移動が促進され、思想の交流が活発化した。デューイは、当時のそのような状況を「知的革命」と呼び、次のように表している。「知識はもはや動きのない個体ではない。それは流動化されているのである。それは、社会それ自体のすべての流れのなかに活発にはたらいっているのである。」（デューイ、2002、p.86）21 世紀の「知識基盤社会」は、デューイの時代に生じた構造的変化の継承であり、情報技術の革新によって、知識の流動がさらに加速化している時代として捉えられる。

「5+1C」のみでなく、今日のアメリカの

教育転換を推進しているマッカーサー財団が示した21世紀に進められるべき教育転換の5つの指針においても、デューイが彼の時代において明確化した新教育モデルの主たる特徴を見出すことができる（アングリン、2016、講演）。

- ①「知ること」から「行う、活用すること」への転換
- ②「教師中心」から「児童中心」への転換
- ③「切り離された学校」から「ネットワークスクール（「インターネットなどによる社会・世界と学校との接続）」への転換
- ④「教科書のみによる学び」から「多様なパースペクティブで構成される学び」への転換
- ⑤「いちかばちかの一度切りのテスト」から「デモンストレーションが伴う真正の評価」への転換

以上のようなマッカーサー財団による提案について言及する中で、アングリン校長は「デューイは非常に進んだ人であり、私達は、デューイが100年前に提案した進歩主義モデルへと後ろ向きに動いているのだ」（アングリン、2016、講演）と、デューイ教育思想の今日的有用性について述べている。

（2）デザイン思考による21世紀型の教育プロジェクト

アングリン校長自身が自ら中心となって携わっているシカゴ大学実験学校小学校の教育プロジェクトには、「デザイン思考（Design Thinking）」を踏まえた21世紀型学習がある。デザイン思考とは、2005年にスタンフォード大学に創設されたデザイン研究所（the Institute of Design）が提供するコースやワークショップで教授されている思考方法論であり、デザインに限らず、ビジネスや教育などあらゆる場面で多様な問題に対して創造的に取り組むための思考スキルを養うことを目的

としている。デザイン思考による方法は、以下の5つのプロセスから構成されることを特徴としている（アングリン、2016、p.6, p.9）。

- ①発見—私には、やりがいのある課題があります。〔どのように課題に取り組んだらよいだろうか？〕
- ②解釈—私は、あることを学びました。〔それをどのように解釈したらよいだろうか？〕
- ③アイデア出し—私には、可能性が見えています。〔何を創り出したらよいだろうか？〕
- ④実験—私には、考えがあります。〔それをどのように組み立てたらよいだろうか？〕
- ⑤発展—私は、あることを試しました。〔それをどのように発展させたらよいだろうか？〕

アングリン校長の発表では、小学校3・4・5年生が協働して取り組んだ「遊び場の建設プロジェクト」が21世紀型学習の事例として取り上げられており、上記のデザイン思考の方法を踏まえつつ、デューイが約100年前に提唱した思考方法を基本的に採用した実践が行われている。デューイの思考方法は、わが国の学校教育においても「生きる力」の育成を図ることを目的とした実践に適用されている例が多く、以下のプロセスを特徴としている（デューイ、2014、pp.259-260）。

- ①生徒がそれ自体のために興味を持つような、本物の経験的場面が与えられる。
- ②①の場面の中で、本物の問題が、思考を呼び起こす刺激として、現れ出る。
- ③生徒は、問題を処理するために必要な、情報を収集したり観察を行ったりする。
- ④解決案が生徒の心に浮かび、自らそれを秩序立て、自ら展開する責任を持つ。
- ⑤生徒は、自分の考えを適用して試し、それらの意味を明らかにし、自らそれらの妥当性を見出す機会と必要とを与えられる。

デザイン思考とデューイの思考方法は、創造的な問題解決を導く思考ステップにおいて類似しているが、両者の相違点としては次の2点が挙げられる。第1に、デューイが提案する思考方法は、子供の本能・衝動の教化を通して人格を形成することがねらいとされており、取り組む問題が外部から課されたものではなく、本人の経験の中から生じたものであることが条件となることである。これについて、デューイは、「真正の問題と、見せかけの、すなわち贋の問題とを識別することが絶対に必要である」と述べ、識別に役立つ2つの問いを提示している（デューイ、2014、p.246）。

- ①その疑問は、本人の経験の、ある状況の中で、自然に心に浮かんでくるのか。それとも、それは、本人には縁もゆかりもないもので、ただある教科の知識を伝えるという目的のためにつくられた問題なのか。それは、学校の外で観察を呼び起こし、実験を行わせるような試みなのか。
- ②それは、生徒自身の問題であるか。それとも、教師または教科書の問題なのか。つまり、生徒がうまくそれを処理しなければ、彼は必要な点数をとるとか、進級するとか、教師に認められることができない、という理由だけから、それは生徒にとって問題となるようなものなのか。

第2の相違点は、デューイの思考方法は、目的や問題を発見したり解決する方法を考え出したりすることを通して、子供の個性化を図ることと合わせて、問題解決のプロセスの中で、自分の行為を他者の行為と関連付けて調整し、共通の行動の意志を形成できる社会性を培うことがねらいとされていることである。

「遊び場の建設プロジェクト」でも、以上の2点を押さえつつ、創造的で科学的な思考

の習慣を身に付けるのみでなく、社会の構成員として必要となる協働的精神を培う学習が展開されている（アングリン、2016、講演）。

「遊び場の建設プロジェクト」は、シカゴ大学キャンパスの拡大と改築にともない、児童が大きな遊び場を失い、遊具のない残された遊び場で遊ぶしかない状況に至ってしまったことから起こされている（デューイ思考方法①）。

そのような状況からキャンパスにおける新しい遊び場の建設の話が持ち上がり、遊び場をデザインすることに児童を参加させるプロジェクトが始められている（デューイ思考方法②、デザイン思考①）。この初期の段階では、戸外の遊びにはどのようなものがあるのか、どのように遊んでいるのか、どこで遊んでいるのか、誰と一緒に遊びたいのかなどについて話し合いが行われ、クラスでまとめて、廊下に大きな掲示板をいくつか設置し、小学校3・4・5年生全員がアイデアを共有し全体に貢献できる場がつけられている（デューイ思考方法③、デザイン思考②③）。

次の段階では、戸外で遊ぶ方法や遊び場に最も必要とされるものについて考えるために、小学校3・4・5年生全員で調査を行っている（デューイ思考方法③、デザイン思考②③）。各学年で代表クラスを決め、調査から得られた情報を解釈し発見したことを全体場で共有するために、デザイン・ルームを設置して、児童一人ひとりが考えたことを貼り出したり、調査から学んだ内容をまとめたビデオの上映がなされたりしている。

次の段階は、アイデアを実行に移す段階であり、シカゴ市在住のランドスケープ建築家を学校に招聘して、専門家が行う遊び場のデザイン・プロセスについて学び、自分たちで遊び場の地図や模型の制作に取り組んでいる（デューイ思考方法④、デザイン思考④）。制作された模型などのアイデアはランドスケープ建築家に渡され、建築家は児童のアイデ

アを踏まえて、遊び場のデザイン案をつくり、保護者も含めて検討を行っている。アングリン校長は、このプロセスを通して、児童は他者のニーズを考慮することができるようになり、多くのニーズを最大限適えることを保証するためには、どのように優先順位をつけていったらよいかを学んだことを報告している。

プロジェクトの終わりの段階では、最終的に決定されたデザインをもとに、2016年夏にシカゴ大学キャンパスに実際に遊び場が建築されている。児童は、夏休みが終わったら、学校に戻ってきて、自分たちのアイデアが新しい遊び場にどのように反映されているかを確認している（デューイ思考方法⑤、デザイン思考⑤）。

以上のプロジェクトのように進められるシカゴ大学実験学校小学校の教育で大事にされていることについて、アングリン校長は以下の言葉で表している（アングリン、2016、講演）。

私達は教師として、児童と向き合っ一緒に学ぶことに責任があり、デューイの考えを振り返って、何が将来、児童に必要とされているのかを考えることは必要ですが、今ここに意識を向けることを忘れてはいけません。それぞれの児童が提供するあらゆる学びの機会を生かすことが大事だと考えています。

4. 考察

アングリン校長の発表である「小学校における21世紀型学習を創る：好奇心、創造性、自信、学問」から、わが国と同様、アメリカの学校教育においても、21世紀の社会の構造的変化を見据えて、知識の量ではなく、子どもの精神の個性化並びに社会化の観点から人間性を育み思考方法の質的な向上を目指す教育実践の開発が進められていることが確認された。

わが国の子供達については、「判断の根拠や理由を示しながら自分の考えを述べたり、実験結果を分析して解釈・考察し説明したりすることなどについて課題が指摘されることや、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識などが国際的に見て相対的に低いことなど、子供が自らの力を育み、自ら能力を引き出し、主体的に判断し行動するまでには必ずしも十分に達しているとは言えない状況にある」（文部科学省、2015、p.6）ことが報告されている。このような現状を継続して改善していくために、シカゴ大学実験学校小学校で進められている教育のあり方は、モデルとなる好例を提示していると思われる。

次期改訂の学習指導要領では、①何を知っているか、何ができるか（個別の知識・技能）、②知っていること・できることをどう使うか（思考力・判断力・表現力等）、③どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力、人間性等）を育てるべき資質・能力の3本柱として「社会に開かれた教育課程」を目指して構造化が図られる。③については、①②の資質・能力を、どのような方向性で働かせていくのかを決定付ける重要な要素として、社会づくりに向けた態度、感性、思いやりなど、人間性に関するものが対象とされている（文部科学省、2015、p.11）。③の要素である人間性にかかわるものを①②の要素とどのようにつなげながら教育課程を編成し学習指導を行っていくかが重要なポイントであり課題となることが予測される。

この点に関して、「遊び場の建設プロジェクト」の事例では、①現実の社会でランドスケープ建築を職業とする専門家と児童との協働を仕組むことで、実社会と学校での学習をつなげるとともに、児童の思考方法の質的向上を目指している点、②児童自身の社会生活の場である「遊び場」を取り上げ、学校のコミュニティの一員として自主性と責任を持って遊び場をデザインする仕事に協働であたらせ

ている点が着目される。デューイの時代の実験学校では、そのような仕事の活動に、専門教科の本質的な内容と方法が織り込まれることで、子ども達の教養をスパイラルに高めることが目指されたが、この点に関しては、今回のアングリン校長の発表で触れられておらず、今後、続けて調査を行う必要性が示される。

註

- 1) アングリン校長が 2016 年 7 月 2 日・5 日の講演「小学校における 21 世紀型学習を創る：好奇心，創造性，自信，学問」で話した内容である（以下，アングリン，2016，講演と略記する）。

参考文献

- アングリン, S. (2016) 「小学校における 21 世紀型学習を創る：好奇心，創造性，自信，学問」『アメリカの教育改革と学校教育の再設計－シカゴ大学実験学校の 21 世紀型学習－』（広島大学学習システム促進研究センター (RIDLS) 講演会シリーズ No.16 資料），pp.5-10。
- デューイ, J. 著（市村尚久訳）（2002）『学校と社会／子どもとカリキュラム』講談社学術文庫，第 6 刷（Dewey, J. (1900) *The School and Society*. The University of Chicago Press.）。
- デューイ, J. 著（松野安男訳）（2014）『民主主義と教育（上）』岩波文庫，第 31 刷（Dewey, J. (1916) *Democracy and Education*. Macmillan Company.）。
- 文部科学省（2006）「中央教育審議会（第 55 回資料 3-1）」，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/07102505/003/003.htm#top
（2016 年 11 月 1 日閲覧）。
- 文部科学省（2015）「教育課程企画特別部会論点整理」，
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/

[chukyo3/053/sonota/1361117.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/sonota/1361117.htm)（2016 年 11 月 1 日閲覧）。

The University of Chicago. (2015a) *The University of Chicago Laboratory Schools The Lower School Handbook 2014-2015*. The University of Chicago.

The University of Chicago. (2015b) *The University of Chicago Laboratory Schools*. The University of Chicago.

著者

中村 和世 広島大学大学院教育学研究科